西宮歴史調査団通信 2018年４月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

西宮市立郷土資料館

「常設展示室」の見どころ

当館の常設展は、歴史的時間軸の変遷に合わせた整然とした配置で、展示内容は歴史的な事項がきちんと検証されていて手堅い。

開館した昭和60年（1985）ごろの博物館の展示水準で言えば、オーソドックスながら、大胆な手法が取り入れてある。展示室中央にどんと構えた「生瀬の街並みと民家」のジオラマ。奥には、リアルな紙すき職人像を配した名塩紙の漉き場の情景再現、樽廻船の精巧な模型が入った四方から観覧できる展示ケース。柱・枠といった建具部材が視界に入り込まないガラス張りの展示ケース。こうした大胆な設定だけでなく、細やかな工夫も施されている。解説パネル等が簡単に設置できるように配された木製壁面の溝。天井からのダウンライトとスポットライトが併用できる照明。観覧者の足元に優しいカーペット敷きの床…などなど。

当館の生き字引である西川卓志前館長によると、開館準備の期間は４年ほど。通常、基本構想から開館まで10年かかるとされる博物館の開設作業が、とんでもないスピードで進行した…とのことである。さらに、展示開発の経験者が居るわけではなく、「（ノウハウを）知らぬ同士が小皿叩いて」ワイワイしながら知恵を絞りだした…という。

基本構想がないままとは言え、基本コンセプトを『西宮市史』におき、郷土の歴史を展示する常設展示室を設けたことが、今日に至る郷土資料館の活動に大きく影響している。

写真上＝西宮市立郷土資料館紀要『西宮の歴史と文化』。　写真下＝常設展示室

開館から30有余年がすぎた現在でも、展示内容に古くささは感じられない。西川前館長が「ぼちぼち賞味期限を過ぎている」と指摘する常設展示であるが、細やかな調査活動の上に組み立てられた展示は、落ち着いて、じっくりと観覧できる（いささか自画自賛であることはご容赦願いたい）。

しかし、当館が開館して以降、各地の博物館での展示の見せ方がずいぶん変わった。多種類の視聴覚機器の利用、土器パズルや複製した資料に直接触れるハンズオン（体験的学習を伴う展示）の設定、再現した情景の中に観覧者が入り込める実物大のジオラマの設置などが多用されるようになった。展示室内では、プロジェクションマッピングの投影などで照明が変化し、解説アナウンスが流れ、体験ゾーンで歓声が上がる。

これらは、当館にはない。自虐的な表現をするなら「堅い」、そして「物静か」…

もちろん次世代を見据えたリニューアルは必然であるが、開館当時の手法や工夫が読み取れる、「賞味期限切れかけ」の常設展示室そのものも「見どころ」はではないだろうか。　（西尾　嘉美）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 5月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

「慶長十年摂津国絵図」の魅力

郷土資料館収蔵資料の花形「慶長十年摂津国絵図」。本絵図は、兵庫県・西宮市指定の有形文化財（歴史資料）であり、摂津国が描かれた最古の絵図で、村高を記す史料としても最も古いものです。

慶長10年（1605）、江戸幕府は全国に国絵図と郷帳の作成・提出を発令します。これに応じて、片桐且元が摂津国奉行として作成した絵図（控）がこの絵図です。控というのは、絵図は正副（幕府提出用・地元保管用）２つ作られました。当館に伝来する絵図は副（地元保管用）というわけです。残念ながら、幕府に提出された絵図は残っていません。

幕府は慶長以後も、国内の実勢把握のため国絵図の作成を命じており（正保・元禄・天保）、各地に遺例がありますがその数は限られています。慶長国絵図は、その中でも遺例が少ないので、この絵図が貴重な文化財だということがおわかりいただると思います。

絵図が当館に伝わった経緯は不明ですが、西宮勤番所＞西宮町役場＞西宮市役所＞図書館＞郷土資料館ではないかといわれています。

当館きっての花形資料なのですが、縦225cm×横249cm（軸装）という形状から、常設展示ができません。指定文化財のため、公開期間にも制限がかかります。

摂津国の範囲にある各行政機関からは、毎年10件程度の写真利用申請があります（○○城が描かれている辺りの写真を使いたい。西国街道が描かれている部分写真を使いたい等）。数年前には長浜市・高槻市・吹田市へ特別展示の資料として連続して出品されたこともありました。江戸時代の基礎資料として欠くことができない存在なのです。大地震が発生した時は、「絵図だけは抱えて逃げようか」という冗談が出ていたほどです。

そもそも絵図という資料は、観覧する人びとの心をつかみます。それは多くの説明を加えなくても、地名や位置関係、絵図に描かれている名所・旧跡等から簡単に絵図の世界に入ることができるからです。絵図資料ほど身近で魅力的な存在はありません。

そして、昨年開設されたウェブサイト「にしのみやデジタルアーカイブ」（略してN.D.A.）では、この絵図が簡単にダウンロードできるようになったのです。いつでも自由に絵図の世界に入り込むことができるようになりました。ぜひアクセスしてみてください。 トップページ (https://archives.nishi.or.jp) から検索できます。

実物資料で体感を

そうはいっても実物資料に勝るものはありませんから、５月例会の観覧会という滅多にない機会に、400年前の摂津国の姿を体感していただければと思っています。なにせ職員でも簡単には見られませんので、ぜひじっくりと。ただ、村名や描かれている細部については、N.D.A.でご確認くださいね。その意味は絵図を目の前した瞬間、ご納得されると思います。（俵谷 和子）

「慶長十年摂津国絵図」に見入る調査団員の皆さん

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 6月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

“埋蔵銭”と中世の銭使い

精銭しか備蓄されないはずなのに…

郷土資料館には大量の銭貨が保存されています。山口町公智神社の境内で4,500点、石在町の国道脇で20,000点弱、合計約24,500点にのぼる銅銭です。地中に埋められたのは近世初頭のこと、日本列島はすでに「銭の時代」でした。

ところが古代の銭貨「乾元大寶」を最後に江戸時代まで、為政者が銭貨を発行しない時代が永く続きました。では、中世になって盛んになる銭需要は、どのようにして賄われたのでしょうか。中国大陸で流通していたものを直輸入したのです。それらの一部が、全国約300箇所で確認されている大量埋蔵銭となって見つかります。銭の大量輸入はいつごろから始まり、どのようにして定着したのか。中国銭に交じる「鐚銭」(びたせん）、いわゆる私鋳銭などはいつごろからどのような目的で作られるようになるのか、などなど。中世の銭貨流通を研究する人たちは、疑問の答えをこの大量埋蔵銭のなかに求めました。

ところが事はそれほど単純ではなく、例えば、鋳写し銭が弁別可能になると、精銭のみが備蓄されたはずの埋蔵銭に鐚銭も適当に含まれることが判明しました。この現象からは、ある種の鋳写し銭が精銭として扱われたことを物語ります。中国銭を鋳写して銭貨のようなものを製造する行為は、たんに贋金を作り出して利益を得る私鋳行為ではなく、銭不足による経済の停滞を打開する方法ではなかったのかとさえ思えます。

しかし、文字通りこれこそは「鐚銭」というものも室町時代末頃には出現します。鋳写し銭を笵型にして鋳銭を繰り返すと、直径が小さくて薄く、なおかつ表面の文字がまったく見えない「無文銭」ができあがります。この実物が公智神社出土銭から確認され、堺市の遺跡からはその無文銭を鋳造したであろう鋳型の実物までが出土しました。公智神社の無文銭と堺の鋳型を合わせると合致、戦国時代に「もじなきぜに」（文字なき銭）として撰銭に関する史料に登場する実物が、その製法とともに明らかになりました。この堺の鋳型の中には無文銭専用の鋳型があり、悪質な銭貨を大量に製造して利益を貪ろうとする極悪人（？）の姿が見えかくれします。小さくて薄っぺらな無文の銭も、97枚ワンセットの「緡」（さし）に繋げて混ぜれば問題なく使用できたのでしょう。精銭しか蓄えられていないはずの埋蔵銭の中に、このような銭貨が紛れ込んだのも、当時の銭貨流通を物語るものとして興味深いことです。

（西川　卓志）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 7月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

1　「銅鐸」とは

「銅鐸」は、弥生時代を代表する青銅器で、祭祀の場でベルのように鳴らして使われた祭器と考えられています。

現在、私たちが目にする銅鐸は錆びているため緑色をしていますが、弥生時代には金色をしていました。また、銅鐸の発する金属音は、弥生人には聞き慣れないものであったでしょうし、その見た目と相まって、彼らにとって神秘的な存在だったのではないでしょうか。

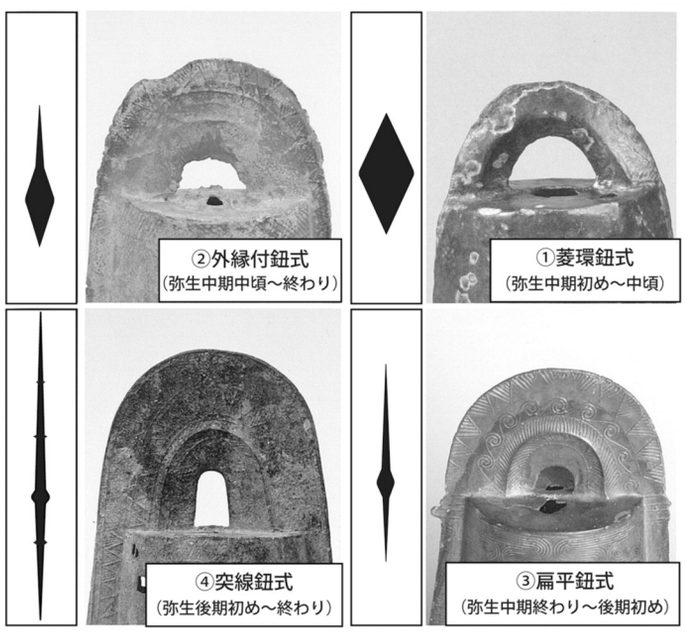
そんな銅鐸をたくさん収蔵している博物館が、市内にある辰馬考古資料館です。今回、辰馬考古資料館へ銅鐸の見学に行くにあたり、銅鐸の見どころについて一部ですが紹介します。

弥生の祭器「銅鐸」の見どころ

2　鈕の変遷
～「聞く」から「見る」へ～

銅鐸の上部にある半円（環）状の部分は、銅鐸を吊り下げるためのもので「鈕」と呼びます。この「鈕」の形の変化は、その銅鐸が弥生時代のいつの時期のものなのかを知る手がかりとなります。

「鈕」は断面形によって、①「菱環鈕式（りょうかんちゅう）」、②「外縁付鈕式（がいえんつきちゅう）」、③「扁平鈕式（へんぺいちゅう）」、④「突線鈕式（とっせんちゅう）」の４つに大別され、①が古く、④に向かってだんだんと新しいものになります。それぞれの特徴についてみていきましょう（右図参照）。



銅鐸の鈕の変化（弥生博2011を元に作成）

最も古い「菱環鈕式」は、鈕の断面が菱形をしているもので、「吊り手」として使うため、厚みがあり、しっかりしています。

つづく「外縁付鈕式」は、菱環鈕の外側（上部）に縁（外縁）がついたもので、外縁を装飾することがあります。この段階の鈕は、まだ「吊り手」として機能します。

さらにつづく「扁平鈕式」になると、鈕の内側にも縁（内縁）がつき、鈕の厚みは薄くなります。ちなみに、西宮市の津門で出土している銅鐸は、この「扁平鈕式」になります。

そして、最後の段階である「突線鈕式」は、外縁と内縁の装飾部分に、突線による区画線をもつことが特徴です。鈕の厚さは薄く、また、銅鐸の大きさが１mを超える大型品も登場し、もはや吊り下げて使うことはできません。

以上みてきた「鈕」の変化は、時期を示すだけでなく、しっかりとした鈕をもつ「聞く銅鐸」から、装飾のある薄手の鈕をもつ「見る銅鐸」への変化、つまり用途・役割の変化も表しています。

3　銅鐸の内側をみる
～どのように鳴らしたのか～

銅鐸は、舌（ぜつ）と呼ばれる棒状の部品を内部にぶら下げて、揺らして、ベルのように鳴らします。その際に、銅鐸内側の下部にめぐる「内面突帯」という帯状の突起に舌がぶつかり、その痕跡が残ります。なかには「内面突帯」がすり減り平らになっているものがあり、その銅鐸がたくさん鳴らされたことがわかります。

博物館の展示等で銅鐸の内側をみる機会は極めて少ないですが、もし機会があれば、鳴らした痕跡があるかどうか確認してみてください。

（瀬尾　晶太）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 8月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

第34回特別展示 八十塚古墳群の時代

～武庫平野における群集墳の成立と展開～

八十塚古墳群は西宮市苦楽園四番町・苦楽園五番町・苦楽園六番町と芦屋市六麓荘町・岩園町・朝日ヶ丘町に分布する古墳時代後期末から飛鳥時代（６世紀後半～７世紀前半）にかけて造営された群集墳です。

「群集墳」とはどういう遺跡なのかというと、規模の小さな古墳が一定の範囲に複数築造されている古墳群のことを指します。群集墳は、６世紀前半に日本各地で造営されます。八十塚古墳群も群集墳に該当し、西摂地域を代表するものです。

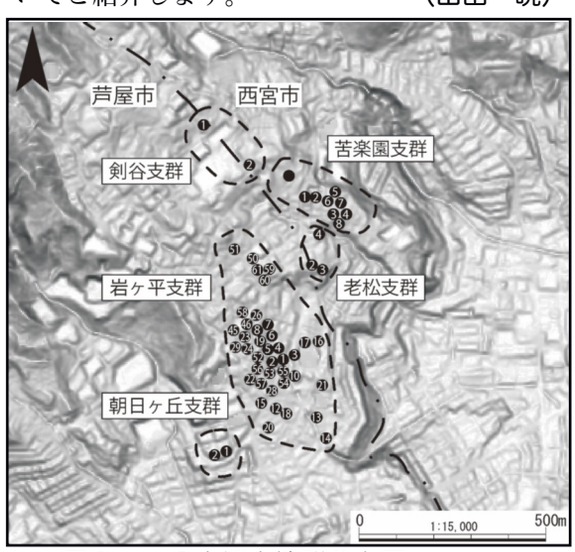
八十塚古墳群は５つのグループに分かれます（図１）。それぞれを朝日ヶ丘支群・岩ヶ平支群・剣谷支群・老松支群・苦楽園支群と呼び、その内、西宮市域にある支群は、剣谷・老松・苦楽園の３支群です。これらの支群は、古墳が密集しているエリアごとに分割されています。群集墳は、その立地が丘陵や山麓のような集落が営まれない場所で、かつ横穴式石室を埋葬施設としていることが多く見られます（写真１）。

横穴式石室の内部には、須恵器や土師器、耳環（耳飾り）などが副葬されています。また、被葬者は木棺に入れられて、石室内に安置されます。木棺の木は腐ってしまいますが、木棺を打ち付けていた釘などが出土することが多くあります。

群集墳である八十塚古墳群は、50年ほどの間で100基近い古墳が造営されていました。

西宮市周辺では八十塚古墳群のみ造営されたのではなく、仁川五ヶ山古墳群や芦屋市の城山古墳群、宝塚市の中筋山手東古墳群など多くの古墳群がほぼ同時期に築造されています。これらの古墳群は、八十塚古墳群とは出土する遺物がやや異なっていることから、八十塚古墳群を造営した集団とは異なる集団が造営した可能性があります。

今回の特別展示では、八十塚古墳群と周辺の後期古墳から出土した副葬品を中心に展示しています。また、八十塚古墳群が成立する以前の西宮市域の古墳や八十塚古墳群と同一時期に築造された古墳、八十塚古墳群が終焉した次の時代にどのような遺跡が出現するのかということについても合わせて展示することで、西宮とその周辺地域、つまり武庫平野における６世紀から７世紀にかけての時代の特徴とその変遷についてご紹介します。　（山田　暁）



＜図１＞　八十塚古墳群分布図

＜写真1＞　苦楽園支群第５号墳横穴式石室

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 9月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

「展示資料」になるまでの道のり

学芸員ミニ研修「文化財調査の華」で取り上げる「太閤窯製花入」は、平成28年度に郷土資料館に寄贈された、初代小西平内制作の茶器です。

寄贈の理由は、作者・初代小西平内が、西宮市に作陶拠点を設けた陶工だったことにあります。本資料は、美術品であると同時に、西宮市の郷土資料でもあり、その価値の高さから受贈することとなりました。

「太閤窯製花入」の御披露目は、新収資料紹介をテーマに実施した、平成29年度アラカルト展示でした。アラカルト展示は、関連資料が少なく企画展で活用し難い収蔵資料を、単独で紹介する一品展示です。一つの資料に焦点を絞って展示を構成するため、資料そのものについて深く研究する必要があります。

初代小西平内作「太閤窯製花入」

本資料の展示にあたっては、現在も太閤窯跡で茶屋を営む、初代小西平内の孫にあたる方から話を聞くことができました。そして、ご厚意により、様々な作風の陶器や文化人との交友がうかがえる品々も拝見しました。研修では、現地調査の成果とその活用事例について報告します。

（笠井 今日子）

「調査資料」から「展示資料」へ

展示と関連する「事業」の組み立て

「指定文化財公開　具足塚古墳出土品」（平成30年９月１日～11月25日）では、①展示解説、②現地説明会、③講座、④こども市政ニュースとの連携、といった４つの関連事業を行います。

その中から、新企画である④こども市政ニュースとの連携について紹介します。

こども市政ニュースとは、西宮市が発行する市政ニュースのこども版（向け）で、７月下旬に、「こども記者（市内小学生）」による郷土資料館の取材が行われました。そのなかで、こども記者と一緒に展示をつくる試みを実施しました。その成果は「こども向け解説パネル」として指定文化財公開展にて展示しているので、そちらを御覧ください。

この試みは、小学生等に郷土史や文化について興味をもってもらうことを目的としたものです。こうした活動をとおして、郷土資料館がこどもたちにとって身近な存在になることが、文化財保護の担い手の育成へとつながるのではないか、と考えます。

（瀬尾　晶太）

こども向け解説パネル　展示風景

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 10月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

「指定」文化財の誕生?!

より手厚い保護へ

1、文化財の「指定」って？

文化財の「指定」は、文化財保護法と都道府県・市町村の文化財保護条例にもとづく文化財を保護する制度です。文化財のうち重要なものを「国宝」や「重要文化財」などに「指定」することができ、それらを「指定文化財」とよびます。「指定」することで、現状変更の許可制などの規制がかかり、未指定文化財よりも強く保護することができるようになります。

例えば、具足塚古墳は「指定」されたことで、「遺跡」から「史跡」へと名称が変わりました。「史跡」は「重要文化財」に相当する遺跡のことを指し、「国宝」に相当する遺跡は「特別史跡」とよびます。

2、新指定文化財「具足塚古墳」について

平成29年10月11日に、高座町に所在する具足塚古墳とその出土品が、「市史跡　具足塚古墳」および「市指定重要有形文化財　具足塚古墳出土品」として、西宮市の指定文化財となりました。

具足塚古墳は、6世紀後半の円墳で、その規模や出土品から、武庫川下流域にいた有力者の墓と考えられています。

具足塚古墳は、江戸時代には存在を知られており、その後『大社村誌』（昭和11(1936)年刊行）などでも紹介されますが、すでに古墳は荒廃し、石室の一部が露出していることが書かれています。昭和49年には、古墳の保存と現状を確認する目的で発掘調査が実施されました。その際の出土品が「市指定重要有形文化財　具足塚古墳出土品」です。この発掘調査によって、具足塚古墳の詳細が明らかとなり、その後の調査・研究により重要性が評価され、昨年度ついに「指定文化財」となりました。

具足塚古墳の出土品（一部）

3、もうひとつの新指定文化財

平成29年度は、具足塚古墳のほかに、苦楽園から甲山にかけて広がる「徳川大坂城東六甲採石場」（江戸時代の採石場の遺跡）の一部が、「国史跡　大坂城石垣石丁場跡　東六甲石丁場跡」として指定されました（平成30年2月13日指定）。

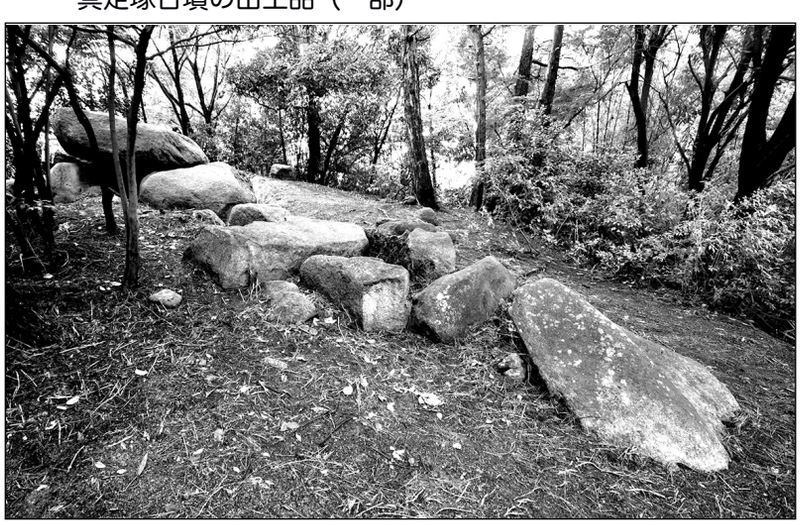
現在、市内に所在する指定文化財は、平成29年度に指定された3件を含めると、国指定文化財78件（登録含む）、県指定文化財23件、市指定文化財54件となりました（平成30年2月13日現在）。

さて、この数字、皆さんは多いと思いますか？　それほどでもないと思いますか？

インターネットでも、各市の文化財の件数や種類のデータが公表されています。

文化庁の国指定文化財等データベースも検索に便利です。一度、検索してみてください。

https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.html



市史跡　具足塚古墳

（瀬尾　晶太）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 11月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

竜吐水

焼印から 細工所をたずねて

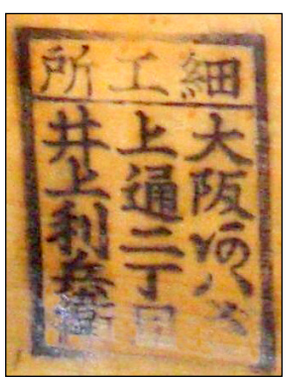
竜吐水班 ミニ発表

2015年度にスタートした竜吐水班調査ではこの4年の間に、江戸時代後期から明治時代にかけて作られた木製ポンプの竜吐水９台、おそらく大正時代以降に作られた金属製の喞筒(そくとう・ポンプの事)３台、その他大型の水鉄砲のような消火器具6台を確認しました。そのいくつかには製作者（細工所）の名が記されているものがあったので、まずは竜吐水にあった焼印を調べてみました。

(竜吐水班 川上早苗)

・井上利兵衛

３台の竜吐水の本体側面に「大坂あハざ戸屋町三丁目」や「大阪あハざ上通二丁目」とあり、現在の大阪市西区西本町１丁目あたりです。明治５年に町名変更があったためでおそらく同じ場所での営業と思われます。



井上利兵衛の焼印

・川邨卯兵衛

４台の竜吐水に焼印があり「大阪釣鐘町二丁目」「大坂釣鐘町天神橋通住」「大坂天神橋一丁南」など住所表記がまちまちですが、いずれも現在の大阪市中央区釣鐘町になると思われます。名前が「川村」の表記もあり、使い分ける理由は不明です。

・富田平吉

遠く東京の「日本橋平松町」で明治2年製作のものですが、今は西宮に残っています。

・平野屋□□□

「大坂阿波本願□□前三右衛門丁」は現在の大阪市西区立売堀3丁目あたり。

ただ瓦林の大庄屋岡本家にあるこの竜吐水の中央の柱には「西宮本町通細工所□□」という焼印もあり、大阪で買って修理を地元西宮でしたのか、など想像しています。

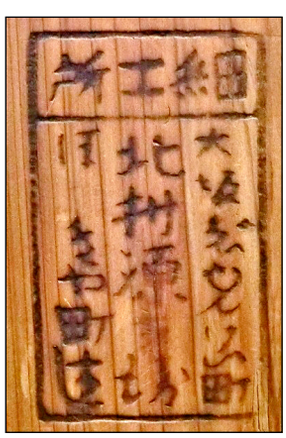
・北村源兵衛

生瀬の淨橋寺の竜吐水には「大坂四ツ橋西南詰南入」とあり、現在の大阪市西区北堀江1丁目あたりになります。

色々調べるうちに、現在は玉造にある(株)きたむら工業という水道事業の会社が子孫にあたると分かり竜吐水も一台残っているということで出張調査に行きました。

焼印の名前から、そちらで作った物ではないかと持ち主から連絡があり、先祖の家業の記念にと譲り受けて保存することにしたそうです。ただ焼印には「大坂順慶町一丁目」(現南船場一丁目)とあり、ずっと四ツ橋で営業していたはずなのに…と理由はわからないそうです。

きたむら工業のもの以外に、高麗橋の鴻池邸にあって今は東大阪の鴻池新田会所で保存されている竜吐水も、北村源兵衛のものだそうです。



北村源兵衛の焼印

続けて調べていると奈良に移築された鴻池表屋にも竜吐水があり、写真で見ると「大坂天神橋一丁南川村」のように見えるので、西宮とは関係ないけれども見に行ってみたいと興味が広がっています。

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2018年 12月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

第47回特集展示

平成30年（2018）は、明治元年（1868）に「兵庫県」が誕生してから、150年の節目に当たります。その節目を記念する事業が、県下で催されています。兵庫県のマスコット「はばタン」と、摂津・播磨・但馬・丹波・淡路の五国をイメージした縦5本のラインを配した、記念事業のロゴマークを目にした方は多いのではないでしょうか。

西宮市立郷土資料館では、兵庫県政150年を記念して、兵庫県が成立した時代の「西宮」（現西宮市域の社会）を回顧する、特集展示を開催しています。通信では、各コーナーで一押しの展示資料とその見どころを紹介します。

（笠井今日子）

兵庫県政150年記念展　西宮、明治の諸相

○明治の始まり、兵庫県の誕生

「明治」という新しい元号は、政府から藩へ、藩から大庄屋へ、大庄屋から村役人へと伝えられました。岡本家文書（市指定重文）の「御触書留帳」《展示資料 №1》には、明治改元を伝える文書が記録されています。「平成」の発表はテレビ中継でしたが、「明治」は江戸時代の情報伝達の仕組みを踏襲して公布されました。

兵庫県政150周年記念事業 ロゴマーク

○明治の改革

新たな国家の形が整うと、国家が保護すべき「国民」を把握するための、戸籍の編製が行われました。中島家文書（市指定重文）には、戸籍編製法を解釈するための「戸籍編製法解」《展示資料 №6》が残されています。この資料の見どころは、全編にわたり振られたフリガナです。「戸籍」を「にんべつちょう」と読ませるなど、従来の制度と結び付けることで、理解を促していたと思われます。

○殖産興業の時代

明治時代には、殖産興業のスローガンのもと、経済発展の基礎となるインフラが整備されてゆきました。現西宮市域では、明治7年（1874）に大阪－神戸間の鉄道が開通し、停車場が設けられました。鉄道工事の取締り規則を示した「西宮ステーション中等人足規則」《展示資料 №15》は、一見すると江戸時代以来の木札による掲示物ですが、第一条に「朝第六時半」という時間の概念が表れていることなどから、社会の変化がうかがえます。

今回紹介した資料は、いずれも明治時代の初め、近世と近代の狭間の社会を表しています。これらの「モノ」から、兵庫県が誕生した時代を感じていただければ、幸いです。

※特集展示の会期：平成30年11月27日（火）～12月28日（金）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2019年 1月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

新春は「展示」研修でスタート

★今月のアラカルト展示の作り方

郷土資料館では、月替わりで一品展示を行っています。その名も「今月のアラカルト」。選りすぐりの一品は、特別展示のようなフルコースとは違った味わいです。

今月のアラカルト展示の開始は、平成14年4月の「今月のアラカルト４月号 新発見、幻の上ヶ原古墳群の須恵器。」からです。それから17年、中断した年もありましたが、開催中の「ゼニマス ～金五両枡～」で112回目となります。

今月のアラカルト展示は、(1)1ヶ月間、（2）資料館の資料１点を、(3)小ケースで展示する、というシンプルなものですが、それゆえの試行錯誤があります。１点とはいえ、事前調査で予想外に多くの事実が分かり、解説パネルに収まらないほど語りたくなることがあります。どうしても紹介したいのに、資料の大きさが展示ケースに収まらないということもあります。そんなとき、(1)～(3)を横に置いて自己主張するか、ぐっと抑えるか…学芸員にとっては、展示とは何かを改めて考え、展示技術に磨きをかける機会となっています。

これからも味わい深い展示をお届けできるよう、工夫を重ねていきたいと思います。

（衛藤 彩子）

「今月のアラカルト1月号
ゼニマス ～金五両枡～」

Photo Kinugasa

2019年
おめでとう
ございます

猪の埴輪（今城塚古代歴史館で）

展示グッズの「一例」

★ 展示グッズいろいろ

展示グッズは資料を見やすくする、状態を安定させる、といった役割を担います。機能別に分類すると、置く・掛ける・傾ける・押さえる・支える・守る・見せる…に分けられます。

置く・掛ける・傾ける道具が、もっとも頻繁に使います。アクリル製の台や木製ボックス、ワイヤーなど、資料を水平・垂直、ちょっと斜めに置くために使います。

押さえる・支える道具は、古文書の端っこがめくれたりする時に、そっと、しっかり、使います。重心が高く不安定なものはテグスで括ります。

守る道具は、展示ケースに入りきらない資料のカバーや、近付き過ぎないための結界（ガード）などです。

見せる道具は、鏡や拡大鏡などを使って、注目ポイントをアピールします。

いずれの道具を使うにしても、学芸員一人ひとりの個性＝クセも発揮されます。いろんなグッズたちは、見せるための道具以外、目立ってはいけないものなのです。そこで、既製品だけでなく、資料に合わせて手作りする場合もありますので、大工・金工・裁縫・編み物などの技術に加え、素材の特性や接着剤などの組み合わせについての知識も必要です。

あちこちの展示会等を拝見するとき、見せ方・グッズの使い方が気になりますし、資料やキャプションが斜めになってる…など、ほとんど職業病です。

皆さんも、学芸員になったつもりで展示をご覧になってみてください。一緒に職業病にハマッてみませんか？　　（西尾 嘉美）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2019年 2月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

文化財調査の華・ワークショップ

★模型で古墳づくりに挑戦

郷土資料館では、夏休みに「親と子の郷土史講座」という小学５・６年生の子どもとその親が郷土史を学んでもらう講座を行っています。講座は、昭和60年から実施している事業で、今年度で34回となります。

今年度の講座は、郷土資料館の特別展示「八十塚古墳群の時代」に関連した「古墳」をテーマにして講義をしました。具体的には、古墳という構造物について、またその埋葬施設の内容の概要について話をしました。

また、古墳がどのように造られたかを簡易な模型を作りながら学んでもらうワークショップも実施し、親子で協力しながら、古墳をつくっていってもらいました。ワークショップで使用する模型は、発掘調査によって確認された古墳（７世紀初頭）の埋葬施設（横穴式石室）を50分の１にしたもので、実際に埋葬施設の石材を積み上げてもらいました。

この模型つくり（ワークショップ）は好評で、親子で話し合いながら古墳時代のお墓づくりである石の積み上げ方を、親子で相談しながら古墳づくり（埋葬施設の構築技術）を学習してもらいました。

（山田　暁）

横穴式石室の模型（見本）

ひょうごミュージアムフェア 出展

★藩札ワークショップ改良の道程

兵庫県では、毎年1回、県下の博物館が一同に会し、ワークショップやポスター展示を通して館の魅力を発信するイベント「ひょうごミュージアムフェア」を開催しています。来場者のべ6,000人から9,000人を集めるこのビッグイベントに、西宮市立郷土資料館はワークショップ出展という形で参加してきました。

出展の目的は、西宮市立郷土資料館・名塩和紙学習館の魅力発信ですので、館蔵資料をモチーフにして、西宮市の歴史をＰＲできるワークショップを開発したいところです。そこで、初参加となる平成26年度のひょうごミュージアムフェアでは、西宮市立郷土資料館の常設展示のコーナーテーマの一つであり、名塩和紙学習館で体験学習することができる「名塩紙」をモチーフに選びました。しかし、実際に紙すきをしてもらうことはできませんので、江戸時代の地域通貨「藩札」の用紙として流通したという名塩紙の歴史を学べるワークショップを開発しました。

ひょうごミュージアムフェア出展の様子

手探りではじまったひょうごミュージアムフェア出展ですが、過去5回の参加経験を得て、ワークショップの改良を重ねてきました。その過程や、ワークショップ開発の進め方・考え方について研修します。（笠井　今日子）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）

西宮歴史調査団通信 2019年 3月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

「記録」を残す、評価する

「平成の次…」

現在の天皇が退位されることになって以来、次の元号は何か？と、かまびすしい限りです。２度も改元に出会うとは、思いませんでした。

江戸時代までは、ちょっと災害が続いたから、運気をあげるために～などという動機で改元したこともあったようです。人一人の一生の間で、改元の体験記録は最大で何回なのでしょう。なかなか目まぐるしい状況だったのでしょうか。

昭和時代が60余年続いたからといって、昭和時代がなんの災禍もなく、穏やかだった訳ではありません。昭和時代の記録を紐解くと、必ずと言って良いほど「激動の」という形容詞が冠せられます。

では、平成はと言えば、阪神淡路・東日本・熊本の震災を始め、大災害が多発したことは確かです。しかし、60余年の昭和と30年の平成では、発生頻度からすれば同じ程度ではないでしょうか。記憶に新しいのと、直接体験している方も多いですし、インターネットで映像などが手軽に見られて、記録保存も容易です。ですから、いつの時代よりも頻発したと思えてしまいます。

人びとは、何かが起きたとき、次に備えて記録を残します。広く知らしめるために記録するというより、とにかく残すことを主眼に置いているとも言えます。中には、こんな素晴らしい対処ができた、自分の地位・能力が役に立ったと、誇らしげに記したものもあるでしょう。後世の人は、それを分析し、解釈します。良きにしろ悪しきにしろ、評価として「○○の」という形容詞が、その出来事・記録に付されます。

文化財調査で触れる歴史的資料は、その何かかが起きた時をきっかけに作成されたものが、かなり多いと思います。私たちが行う調査は、昔の人たちの足跡を知るというより、アラ探しをしているのかも知れませんね。

歴史調査団のみなさんの活動は、自らの意思で歩いて、調べて、考えて…コツコツと積み上げていく成果は、地道な、地道な記録です。大事件が起きたから残しているわけではありません。

では、次の時代の人たちは、私たちの残した記録を調べて、解釈をして、どんな評価をするのでしょう。そして、どんな形容詞が付くのでしょう？　楽しみです！

（西尾　嘉美）

ひとつひとつ記録する（竜吐水班調査風景より）

編集・衣笠周司（竜吐水班.橋梁班）